

「子どもと共に」

—— “先生” 二年生の記 ——

平岡 美生

私は三人兄弟の末っ子のせい、小さい時から自分よ

り小さな子どもが大好きでした。そしてその気持ちのま

ま、幼稚園の先生になりました。一年目は幼稚園の中

も一番小さい年少児、そして二年目の現在は年中児と共

に毎日を過ごしています。

新米の私には、今日の保育は充実していたという日よ

り、今日も……という反省や迷いの日々ばかりです。そ

んな中での二年間の子どもの様子・出来事などを書きた

いと思います。

○先生

初めて先生と呼ばれたのは教育実習の時でした。かわ

いい声で呼ばれると何となく嬉しくなったのを覚えてい

ます。しかし現実に先生となった途端、戸惑ってしま

いました。毎日毎日子どもたちが甘えてきたり、助けを求

めたり、ケンカの仲裁を求めてきたりと容赦なく「せん

せい！」を連発するのです。またある時はお母様方から「先生と呼ばれるのです。私が先生？」。私よりも年上で子どもを生み、育てていらっしゃる人生の大先輩に、私が先生として話をする……。こんなことを先輩の先生に相談すると

「年令は上でもあなたは先生の資格を持っているプロなのよ。」

と話してくださいました。もちろんプロにも初級・中級・上級があります。私はまだまだ初級ですけれども、それ以来、私なりに先生としてお母様方とお話しをして、時には助けていただいています。

そしてもちろん子どもたちにも、助けてもらっています。降園前に連絡帳に手紙を入れ忘れていた日がありました。

「ごめんなさい。先生手紙入れるの忘れちゃった」

「先生なんだから忘れちゃだめだよ。」

「あら、みんなだっけ忘れ物することあるでしょ。先生も皆と同じなのよ。」

子どもたちは不思議そうな顔をしていました。でもそれからは、

「先生は忘れん坊だからなあ。」

と、言いながらいろいろと教えてくれることが多くなりました。先生という言葉にすっかり慣れてはきました。が、いつまでも「私が先生？」という気持ちは持ち続けたいと思います。最後に子どもにとっての先生とは、どんな存在なのでしょう。子どもとの会話で御想像いただけますか。

「先生にもお父さんとお母さんいるの？」

「うん、いるわよ。」

「本当？」

「先生いくつ？」

「7さい」

「それなら私のお兄ちゃんといっしょだね。」



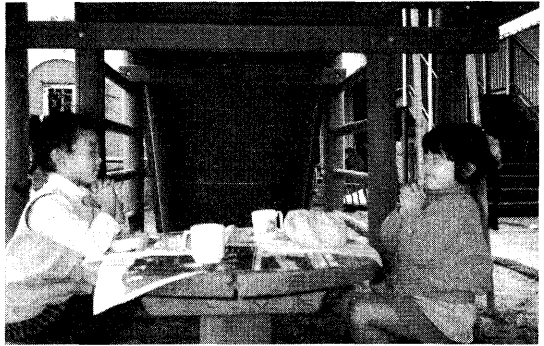
雨の日の散歩

「先生なにどし？」

「ぶたどしよ。」

「ふーん。僕はいぬで妹はいのししだよ。」

○お祈り



お祈り

私たちの園はキリスト教主義の幼稚園なので毎日の保育のどこかで礼拝を持ちます。心を静かにし、讃美歌を歌い、お祈りをします。神様に、毎日元気で幼稚園に通える喜び、自然の恵みを与えられている感謝の気持ち、また病気などで休んでいる子どもを治してくださいよう

にという願いを、お話しする時です。入園したての頃は、「天の神様」も「アーメン」もわからない子どもたちなので、少しずつお祈りをしてゆきます。

七月の小雨の中、教会まで散歩に行きました。

「雨が降っているのにお散歩？」

「長靴だからいや。」

知らないうちに子どもは、お散歩は晴れた日と決めていたようですが、歩き出すと嬉しそうでした。教会の庭には紫陽花が咲き、木々はしっとりとして、濃い緑色におおわれていました。その場所で子どもたちは目を閉じてお祈りをしました。雨のおかげできれいに咲いた紫陽花を見て、木の薫りを感じながらの子どもたちの隠やかな「アーメン」という声が聞こえました。

また、十月の良く晴れた日に園庭でお弁当を食べた時のことです。それぞれ好きな所にお弁当を広げたので、食事の前のお祈りは子どもたちにかかせることにしました。

「天の神様、いただきます！」

「神様、今日もおいしい食べ物ありがとうございます。す。アーメン。」

思い思いにお祈りをしていました。まだお祈りに慣れない友だちに、

「はい、手を合わせて。私がお祈りするからアーメンと言ってね。」

というすっかり者もいました。

このように目に見えないものに対しても、祈ること、それぞれの子どもなりに近づいているのがわかりました。

○はだし

梅雨の合い間の晴れた日は、園庭が海のない砂浜になります。園庭に砂場があるのではなく、砂場全部が園庭なのです。ですから子どもたちは、はだしになって水遊びを盛大に始めます。その時は私もはだしになっていっしょに走りまわっています。素足で砂の上を走るのはいくつになっても気持ちのいいものです。



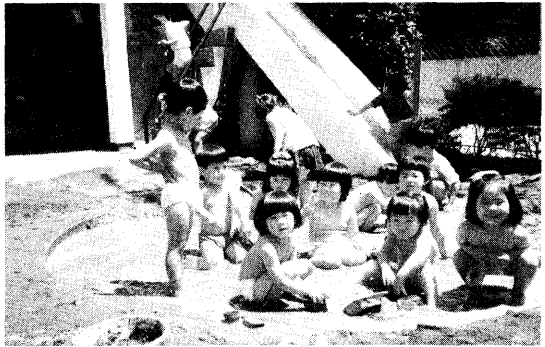
はだし

しかし、その暑さの中、くつ下も靴もはいて、汗びっしょりになり遊んでいるA君とB君がいました。

「暑くない？ はだしになれば」

「うん。いいの。いいの。」

「はだしになるの気持ちいいわよ」



はだし

「いいんだよ。だってまったくつ下はくの面倒だから。なあー。」

「いいのよ。部屋の中でもはだしのままで。」

「いいんだってば！ 僕のおばあちゃんが言ったもん、はだして遊ぶとばい菌がつくからって。」

私はあわててつけ加えました。

「大丈夫！ ばい菌なんかあとで足を洗えば落ちるわよ。先生は小さい時からはだしで遊んでいるけど病気になるかならないわよ。」

それでも二人はしばらくそのままでした。A君は理論派なので、私の話ではまだ納得できない様子、B君は几帳面な性格なので、なかなか手強そうです。強制しても楽しめるものではないので私はその場を離れました。それが良かったのかいつの間にか二人は、はだしになって他の子どもといっしょに泥んこの遊びをしていました。

足を洗い、部屋に入ると二人がくつ下をはこうとしていました。

「気持ち良かったね！」

「うん」

この会話を聞いたのもう何も言いませんでした。

○楽しいこと

年少児も二学期になると随分と落ち着いてきました。

年少の担任をしているもう一人の先生と、何か子どもたちといっしょに楽しいことができたらと考えていました。

「クッキー作りなんかどう？」

「わぁー、楽しそう」

ということでは話はずぐにまとまりました。それまでは保育における六領域が、常に頭にありましたが、なるほどこういう領域があっても楽しいものだと思います。

ぐりとぐらの絵本を手本にして、子どもたちにクッキーの材料をきいてみました。バター・砂糖・卵・粉とポンポンでできました。それに私たちが、バニラ・エッセンスとベーキング・パウダーという魔法のくすりを教えて、それから面白い物です。お母様とのお買い物とは違う楽しさが子どもにはあったようです。クッキーを作る時は、先生がお料理の先生に早変わり、子どもたちもバターを練ったり粉を混ぜたり、男の子も得意顔でした。バニラ・エッセンスの甘い匂いには、皆、うっとりとした



手づくりクッキー

様子でした。型抜きをして焼きあがったクッキーは小さなものでしたが、子どもたちは大事そうに少しずつ食べていました。

年中児の楽しいことは、三学期になり、少し趣向をこらし、三クラス合同のこままわしパーティーを開きました。



サンドイッチづくり

た。招待状・バッグを作り、クッキーも焼きました。そして当日は、お弁当の代わりにサンドイッチを一人一人作りました。パン・チーズ・ハム・パンと順に重ねていく簡単なものでしたが、子どもたちは自分で作ったというところが嬉しかったのでしよう。残す子どもは誰もいま

せんでした。クッキーを持って帰るC君は、

「二個しかないけど、お父さんとお母さんと弟に分けてあげるんだ」

と言っていました。

子どもにとって楽しいことが、毎日、家庭や幼稚園、または友だち同士のどこかであればいいと思います。あの先生がこうおっしゃっていました。

「子どもが夜寝る前に、ああ今日も楽しかったと思えばその一日は満足できたものといえるでしょう。」
子どもも私も毎日こうありたいと願っています。

(ひこばえ幼稚園)



パーティー